

## 木曽川のワンド環境改善の取り組み

木曽川は、かつて氾濫原が発達していましたが、近年では砂礫の河原が減少し樹林化が進行しています。この原因は、本川の河床低下に伴う河岸との比高差の拡大による洪水営力の減少等が考えられます。またかつてのワンドは樹木の中に孤立し、周りの樹木からの落葉等もあり、泥が厚く堆積し嫌気化している状況です。このためワンドの底に生息する二枚貝が見られないワンドも多くあります。特に絶滅の危険性が極めて高いイタセンパラ等のタナゴ類は、イシガイやドブガイ等の二枚貝に産卵するため二枚貝の減少は絶滅の危険にもつながりかねないものとなります。

イタセンパラ等の生物を守っていくために環境の悪化したワンド環境を改善する必要がありますが、泥厚と二枚貝、ワンドどしりのつながり、ワンドの大きさと生物の生息状況等についての



樹木の中に孤立したワンド

知見をもって保全対策を考えていく必要があります。しかしながら、事務所にはそのような知見が十分でないのが現状です。

自然共生研究センターでは、木曽川のワンドの泥厚、貝類、魚類等の調査を行っており、ワンドと生物の生息状況等の研究成果を持っていました。これらの成果をワンド環境の改善のための検討に利用しています。また自然共生研究センターの方々からご指導を頂きながら対策を進めています。対策工事は現在、底泥を取り除く浚渫工事やワンド周辺の樹木の伐開工事を行っています。今後は更に、本川とワンドのつながりの確保や洪水時にワンドに働く力等について検討し対策を進める予定です。

中部地方整備局 木曽川上流河川事務所  
河川環境課長 白江 健造

## 河川環境の情報発信

Dissemination of Knowledge

### ポイントブックⅢが発刊となりました!!

“ポイントブックⅢ”が平成23年10月に発刊されました。ポイントブックⅢは平成22年8月に改訂された「中小河川に関する河道計画の技術基準」の解説本であり、ポイントブックⅡに記述されていた河道計画の計画・設計論に加えて、河岸・水際部の取り扱いについての詳細が含まれています。

ポイントブックⅢは全部で11章から構成されています。2～4章の分量が全体的に多く、2章に河道計画、3章に河岸・水際部の機能、4章に河岸・水際部の計画・設計を記載しています。この中で、3章は自然共生研究センターで実施した河岸・水際部に関する研究成果がふんだんに盛り込まれており、自然状態の河岸・水際部が有する様々な生息場所としての機能が研究成果に基づき紹介されています。4章では、河岸・水際部の計画・設計フローを明確にし、護岸の必要性の判定を行った上で、護岸を設置する場合には、護岸を背後に設置し、その前面に自然材によって河岸を造成する場合（護岸と河岸の分離）、護岸が露出する場合の2つに分けて設計上の留意点を整理しました。護岸と河岸の分離は、ポイントブックⅢにおいて初めて提案された考え方です。従来は護岸に自然河岸が有する環境機能を盛り込んだ高機能護岸の活用を考えていましたが、このアプローチが技術的・コスト的に困難であると判断し、侵食防止機能を有する護岸、環境上の機能を有する河岸に分離して

別々に設計することとしました。護岸が露出する場合の留意点についても河川景観、自然環境の保全の観点からその詳細を記述しています。

図版、写真が多く非常に解りやすい内容となっておりますので、これを機会に是非ご一読頂き、多自然川づくりの普及にご活用下さい。

(独) 土木研究所 自然共生研究センター  
センター長 萱場 祐一

